

気になる子への支援②

監修/久保山茂樹
(国立特別支援教育総合研究所主任研究員・
臨床発達心理士)
イラスト/長谷川まき

今月の
テーマ

集団活動になじまない

新年度がスタートして1か月。
園生活にも慣れてきてクラスが落ち着き始めるころ。
気になってくるのが、集団になじめず、
活動への参加が難しい子どもたちです。
そのような子どもたちをどうとらえ、対応していけばよいのか。
集団に入る場面や活動中における気になる様子を
想定しながら考えていきましょう。



保育者のキモチ

- 声をかけても全然来てくれない。わたし(担任)が嫌いなのかな?
- また立ち歩いている! ほかの子どもも落ち着かないわ
- あの子がいると活動が進まない……

子どものキモチ

- 部屋に入るのが怖い(嫌な音がする、ざわざわして落ち着かない)
- もっと、このあそびをしたい
- どこで何をしたらいいのかわからない
- 保育者の言っていることがわからない



「集まって」「お部屋に入ろう」と言っても嫌がって来ない



活動に誘っても、嫌がってやらない



音楽がかかると耳をふさぐ



ちょっとしたことで気が散ってしまう



すぐに立ち歩いたり大声を出したりする



対応のヒント

1 「参加」のとらえ方を考える

そもそも何のための集団活動か。かかわりの中で協同性が育つ、一人ではできないダイナミックな活動の実現……などと考えると、始めから終わりまではみ出さずに参加することだけが重要なのか、ということへの答えが出ると思います。次の例のように、見方を少し変えるだけで、肩の力が抜けてくるのではないのでしょうか。

例

「このほり製作に参加しないAちゃん」の見方を変えると……

- 活動に参加しなかった
→友達が作っている様子を見たり、出来上がったこのほりの飾る様子を見たり、Aちゃんなりに興味をもって参加していた。
- 製作途中で活動を外れた
→「折り紙をちぎる作業」には参加した。
- みんなでできるのにAちゃんだけ……
→Aちゃんは数か月前、部屋に入るのも嫌だったが、今ではみんなと同じ空間にいる……(ほかの子と比べずに少し前のその子の姿と比べる)。



今までは部屋に入るのも嫌がっていたのに、今回は友達製作の様子を興味深く見ていました。次は自分からやろうとするのではないかと、楽しみにしているんですよ。

対応のヒント

2 見通し・予告を工夫する

「集まって」と言われてもあそび続けている、行動の切り替えが難しいという場合、見通しや予告を明確にしてみましょう。今やっていることはいつまでできるのか、次に何をやるのかがわかっていると、心の準備ができて切り替えがスムーズにいくことが多いです。

言葉だけでと伝わりにくい場合は、絵カードや予定表を見せる(4月号P.80参照)、時計を指して「長い針が6になったら……」と予告するなど、その子の理解度に合わせて、伝え方を工夫しましょう。確認すると安心という子どもには「マイ予定表」(右記)を活用するのもよいでしょう。

なお、行動の切り替えが難しい子どもの中には、十分にあそびこめていないということが少なくありません。この場合、思い切りあそんで満足できるように、あそびの充実を考えましょう。

●時計にマークを付けて



文字盤の外側にマークや好きなキャラクターを付け、「〇〇になったら……」などと伝える。1~12すべてにマークを付けておいてもよい。



一日の予定を記しておき、終わった活動に自分または保育者が丸を付ける。コピーして持ち帰ると、園での様子が保護者に伝わり、親子のコミュニケーションにも役立つ。

対応のヒント

3 苦手なものの・気になる原因を知る

大勢が不規則に動き回る様子やざわざわした雰囲気や音が耐えられない、ピアノやCDの音がだめなど、動きや音に過敏な子どもがいます。この場合、不要な音楽はやめる、ほかの子どもたちが落ち着いて静かになってから部屋に入るように誘導するなど、苦手な刺激を避ける工夫をするとうよいでしょう。

また、何かに気が散って集中できないということもあります。壁の飾りや風で揺れるカーテン、給食のにおい、飛行機の音など要因はいろいろ。この場合もできる範囲でその要因を取り除くようにします。

絵本の読み聞かせの際、パネルシアターのパネルを背景にしたら、集中できるようになったという報告も。



なお、飛行機の音が気になったので、活動を中断し、「飛行機の音がするね。見てみようか」と言って、クラス全員で外を見たという例もありました。活動を中断すると元に戻れるか不安、と思うかもしれませんが、「外見ないの!」「歩いちゃダメ」と言い続けながら無理に話を進めるより、いったん中断し、納得するまでながめたほうがその後の活動が落ち着いて進められるということもあります。

対応のヒント

4 自分の居場所を明確にする

単に自分の居場所がわからないから歩き回っている子どももいます。一度席を離れると元に戻れなくなってしまうのです。子どもにとって保育室は意外と広く、自分がどの位置にいるのかわからないということも考えられます。

床に直接座って集まる際、大きなござを用意してその上に座るよう促したり、特にわかりづらい子どもには、専用の座布団やカーペットを用意して保育者の隣に置き、「〇〇ちゃんはこのね」としてもいいでしょう。

座る場所を決めていない園も多いのですが、「好きな所に座って」と言われると困ってしまう子どもがいます。机や机に個人のマークを付けるのも一つの方法です。

●大きなござで



●マイカーペットで



このようなマイカーペットで自分の位置を明確に。



対応のヒント

5 保育を見直す

実際のところ、活動内容が難しくても、保育者の伝え方が不十分でも、大半の子どもたちが、友達の様子を見たりその場の雰囲気を察したりしながら自力で理解し、活動に参加できているようです。そしてこの自力で理解することが難しい何人かが、「集団に参加できない子」と問題視されているとも考えられます。子どもの課題を見つけることも必要ですが、保育者自身を見直すことも重要です。

自己評価が難しくければ、保育者同士、互いの保育を見合うのもいいでしょう。



+α 保育の見直しポイント

次のような観点で自分の保育を見直してみましょう。

- 活動内容が難しいか?
同年齢のクラスの中でも子どもの発達段階には差があり、同じ説明でも理解できる子とそうでない子がいる。そのため個別の配慮が必要になる。
- 時間の配分はどうか?
話を聞くだけの受け身の時間が長すぎると、集中できないことも。話を聞く時間と活動する時間の配分を考慮する。
- 保育者の話し方はわかりやすいか?
製作物の作り方やあそびのルールを一気に話すとわかりにくい。また、話しながらせわしく歩き回るなど、保育者の動きが子どもを落ち着かなくさせているということもある。
- 保育者の声は聞き取りやすいか?
声がかん高い、こもっている、早口などで聞き取りづらいことがある。声だけでなく話すときの視線や立ち位置を直すだけでも聞きやすくなることもある。
- 話を聞く環境はどうか?
子どもたちの座る位置や保育者との距離、子どもの視線の先に気の散る物がないかなどを確認する。逆光で保育者の顔や見せている物が見えないこともあるので要注意。

*話し方の具体的な工夫については、別の号で改めて解説します。

Column

一人で抱え込まないで

早めのSOSで解決策を見つける

特別な支援を必要とする子どもが在籍するクラスの担任には、大変な苦勞があると思います。支援の必要な子どものかかわりやその子を含むクラス運営に悩み、自分を責めている人、「もっと頑張らなくては!」と思っている人はいませんか? しかし保育者側に余裕がないと、どうしても視野が狭くなり、よくない行動が目が行きがち。その結果、子どもとの関係が緊張感のあるものになってしまうこともあります。多様な子どもたちがいる中、保育者一人ですべてを解決できないのは当然だと思います。一人で抱え込まず、早めにSOSを出しましょう。

ほかのクラスの保育者なら、案外、その子の好きなこと、得意なことに着目できて、かかわりを改善するきっかけが得られるかもしれません。また、よくない行動が起きたとき、多くの保育者の情報を集めることで、その子なりの理由があったということに気づくことができるかもしれないのです。

知恵を出し合うケース会議

一人で抱え込まないためにも、気になっている子どもについて園内のケース会議を利用し、多くの保育者の意見を聞いてみましょう。

ケース会議というと、資料を準備して報告し、厳しいやり取りや先輩からの指導がある……など堅苦しいイメージがあるかもしれませんが、しかし大切なのは、「とりあえず明日、あの子どもとどうかかわるか」について、できるだけ多くのアイデアを集めることだと思います。「とりあえずこれをしてみよう。それでもダメならこれでいこう!」と、みんなで試行錯誤する雰囲気があると元気が出ますよね。

(久保山茂樹)

A5ちゃんがずっとテラスにいて、入ってこないんです。

〇〇組では、ブロックを準備してやっていましたよ。



そのブロック、A5ちゃんのクラスに貸してあげたら?